

自然があるから

先人の知恵があるから

守る人がいるから、今輝く

明治40年〜42年頃、現在の小諸市の大久保区と水区には合計14の風穴が存在し、主に養蚕業で使用された。現在は、明治7年3月に造られた氷風穴1基のみとなったが、現在、その価値や貯蔵環境の良さから再び注目を集めている。

風穴

ふうけつ

特集・天然の冷蔵庫

天然の冷却システム

夏、岩屑のすき間から冷風があふれ出るところが風穴（冷風穴）と呼ばれる。

日本の風穴のほとんどは、たくさん石や岩（礫）が堆積した岩塊斜面などの環境下にある。地下には広い隙間やトンネルがあり、ここに冬の寒さを夏まで効率良く保存するシステムが備わっている。寒さを蓄積する保冷剤は、冬場に冷却された岩石。岩石が冷たさを維持し、さらには、春から夏に地下の隙間に残る水が冷たさを保つ。

全国でも貴重な「氷風穴」

小諸で唯一、現在も活用されている風穴「氷風穴」は、全国でも貴重なものとなっている。

江戸・元禄年間には、氷風穴で凍氷を貯蔵して、時の藩主に献納していた記録が残っている。

明治・大正時代に長野県は「蚕糸王国」と呼ばれていた。全国にある風穴の約半数近くが長野県内にあったため、「養蚕」に強かった。養蚕の時期は、春蚕の1回飼育が普通だったが、風穴の低温を利用した蚕種の冷蔵保存により年に5〜6回の養蚕ができるようになったのが理由に挙げられる。

また、小諸は蚕種貯蔵量で日本一だった。

氷風穴のほかに、当時現存していた氷風穴よりも大きい「小諸風穴」は、蚕種取扱量では全国で一番多く、氷風穴は4番目に多かった。

現在、小諸風穴は残っておらず、全国でも活用中の風穴は20ほどしかないため、氷風穴は貴重なものとなっている。

※全国各地の風穴の蚕種紙貯蔵取扱量（貯蔵高3年累計）

小諸風穴76万枚、富士風穴44万枚、風穴本元44万枚、氷風穴42万

※風穴の実績を量る単位は「枚」である。
蚕の卵（種）が産み付けられた「蚕種紙」を貯蔵収容するため。

